

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

韓国の市民社会における実践の考察

田 中 景

はじめに

現代韓国において最も示唆的な政治学者の一人とされる崔章集（チュ・チャンジブ）氏は、市民社会とは一般に国家と個人の間介在する自律的な集団が組織される領域であり、そこには利益団体、非政府組織、運動の三種類の構成要素があると定義している。もともと市民社会とは西欧に由来し、市民を代弁する機構としての国家が公的権力を拡大させ、個人の利益や私的領域を侵食することに抵抗するものとして始まったものであり、よって根本的に自由主義的である。さらにこのことに関連して、市民社会とは社会の道徳的秩序、イデオロギー、あるいは理念を含むものであるが、それらは独占的あるいは制約的であってはならず多元的であることが市民社会の成熟度の指標となる。

その上で崔章集氏は、韓国における市民社会とは、1980年代末の民主化運動が高揚した時代に出現し、権威主義国家に対抗する民主的領域として発達したと説明する。そこでは西欧社会に見られるような個人の権利としての経済的・私的利益の追求ではなく、市民一般の公的な利益の擁護が追求されてきた。そのため韓国に形成された市民社会は自由主義的ではなく民主主義的であり、そこで重要なのは公的精神ないしは公共善の価値である。そして、組織や運動はそうした公的精神ないしは公共善を代弁するものとして存在してきた。半面、韓国の政治理念として冷戦反共主義が覇権的である中で、運動が高揚した時代以外の時期において特に市民社会のイデオロギー的・理念的側面は制約されざるを得ない。加えて1991年のソ連邦の崩壊、その後のアメリカ主導型の新自由主義経済やグローバリゼーションが進展する中で、学生や知識層による民主化運動の勢いは弱まり、非政府組織の多くは国家コーポラティズムの傘下に包摂された。結果として、民主化以後の市民社会は自律性や多元性を大いに制約され、「ヘゲモニー構造に統合された保守的な市民社会」と「民主化運動の基盤としての非ヘゲモニー的な市民社会」に区分されたと崔章集氏は分析している¹⁾。

韓国の市民社会が国家権力に対抗し、公共善あるいは韓国社会に普遍的な倫理観を代弁するものであるという崔章集氏のテーゼに基づき、本稿では現代韓国における非政府組織によ

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

る朱論介を祀る活動を二つ取り上げ、市民社会の側面を描写してみたい²⁾。朱論介とは16世紀の壬辰倭乱（日本史では文禄・慶長の役とされ、豊臣秀吉による朝鮮侵略を意味する）の時に夫と朝鮮のために殉死した実在の女性である。二つの活動のうち一つは、朱論介の出生地である全羅北道長水郡チョンラ ブク ドチャンスーグンで毎年開催されている論介の精神を祀るための「朱論介祭」であり、もう一つは、2014年セウォル号沈没事故を受けて2015年にソウル市庁舎前の広場で開催された犠牲者を追悼するための集会である。特に後者の2015年の集会では、事故で亡くなった人々の鎮魂とその遺族たちに癒しと奮起を促すために韓国伝統舞踊作品「論介サルプリ」が舞われたことに着目する。

1. 朱論介を祀ることの経緯

朱論介は1574年、全羅北道長水郡大谷里朱村で父・朱達文（チュ・ダルムン）と母・密陽ミヤン朴（パク）氏との間に生まれた。論介は5歳の時に父を亡くし、以後、縁あって長水縣監（地方の行政長官）であった崔慶会（チュ・ギョンヘ）とその妻の庇護のもとに母とともに役所の作業場で雑用をして暮らすことになった。1590年、論介が17歳の時に妻を亡くした崔慶会の後添えとなった。1592年、壬辰倭乱の際に崔慶会は全羅義兵隊長となり、義勇軍を率いて慶尚北道晋州キョンサンブク ドチンジュへ向うが、この時論介も夫に随行した。翌年1593年6月、崔慶会率いる義勇軍は晋州城の戦いで豊臣軍に敗れ、崔慶会は自刃して殉国した。論介は夫と国の恩讐を果たすため、妓生キーセン（芸妓のこと）に仮装して晋州城内で行われていた豊臣軍の戦勝祝いの宴に潜入し、酒に酔った武将・毛谷村六助を南江ナムガン近くの岩場に誘き寄せ、毛谷村を抱きしめたまま南江に身を投げて殉国した。この時、論介は19歳の若さであった³⁾。

壬辰倭乱の後しばらくの間、論介は妓生と思われていたことから文書に記録されることがなかったが、やがて儒学者たちによって論介の殉死は戦乱時に救国のために身を捧げた崇高な精神として称えられるようになった。晋州ではすでに1626年に儒学者・鄭大隆（ジョン・デリュン）によって論介が毛谷村を抱き締めて河に身投げした岩に「義巖」という文字が彫られ、1722年には「義巖事蹟碑」が建立された。続いて1739年、慶尚右兵使・南徳夏（ナム・ドクハ）は王の許可を得て「義妓祠」を建立し、位牌「義妓論介之碑」を安置した。同時に「義巖事蹟碑」に碑閣を建て、「義妓論介之門」の懸板を掲げた。「義妓祠」は1779年、1823年、1868年に当時の晋州牧使によって再建や補修が繰り返され、1868年の修復の「義巖別祭」が行われるようになった。日本による植民地時代には祭祀を執り行うことが禁止されていたが、1960年代になって正式に復活し、現在、晋州市では論介精神宣揚会の主催で毎年5月に「晋州論介祭」が、また陰暦6月30日に義妓祠で「論介祭香」が行われている。

一方長水では、論介が育った里として長水を記念するために、1846年に当時の懸監・鄭

胄錫（チョン・ジュソク）によって「義妓論介生長郷堅名碑」が建てられた。日帝による植民地時代になると論介の碑文は破棄するよう命じられ、晋州同様、祭祀を捧げることも禁止された。しかし長水の人々によって碑文は土の中に埋め隠され、祭祀もまた秘かに執り行われた。朝鮮が解放された直後の1945年8月20日に郡民によって碑文が掘り起こされ、さらに1955年10月3日に南山に「論介祠堂」が建てられた。朝鮮戦争休戦からわずか2年後の荒廃期にあって地域住民が寄付金を出し合い、祠堂の建立が実現した。その日、人々が白い韓服を着て完成した祠堂の前に集まる光景は、まるで白い雲のようであったと記録に伝えられている⁴⁾。これ以降、祠堂の前で「論介祭禮奉」が執り行われてきた。1974年には「論介祠堂」は中央政府の支援を受けて現在地の7,000坪の敷地に移設され、さらに1996年から98年にかけて敷地面積は7万6,000坪に拡張された。また、1980年代以降には論介の生家跡の復元と整備が進められた。当時、論介の生涯について研究していた長水出身の詩人・高斗永（コ・ドゥヨン）氏が論介の生家跡近くの小学校に教頭として勤務していたが、論介の精神を教育現場に反映させたいとの思いから小学校校庭に論介の銅像を建てた。その後、高斗永氏は生家と女性教育場を建設するための支援として韓国政府に30億ウォンの予算を申請して受理されるが、生家の建設地を巡って議論が長引き、結局3年後に政府より2億ウォンの支援を得て長溪面朱村に生家が建設された⁵⁾。さらに1997年から2000年にかけて韓国政府より75億ウォンの支援を得て生家敷地内が整備され、2万坪の敷地内には復元された生家と井戸、論介の銅像、そして詩碑が建てられ、詩碑には独立運動家・韓龍雲（ハン・ヨンウン）氏による論介についての詩が刻まれている⁶⁾。1967年に長水郡庁が論介の誕生日である陰暦9月3日を長水郡民の日に制定し、祝祭行事を行ったのを始まりに1992年までは長水郡庁が、1993年から1999年までは長水文化院が祝祭行事の主管となった。そして2000年からは社団法人義巖朱論介精神宣揚会（これ以降、論介精神宣揚会と表記）によって毎年論介の誕生日前後に「祭禮奉」と「朱論介祭」が執り行われ、今日に至っている⁷⁾。このように、晋州および長水において市民（朝鮮時代は臣民）の論介の精神を尊び、論介を祀るための営為は、古くから中央政府（朝鮮時代は国王）の承認や支援を得てなされてきた。

このような論介を祀るための実践は、その当初から容易であったわけではない。朝鮮王朝時代の儒教規範においては、国家あるいは主君に対する忠誠を意味する「忠」とは本来は男性の徳であり、それに対して女性の徳とは夫への献身的な愛を意味する「烈」とされるためである。そのため、儒学者の中には論介が女性でありながら殉国したことを非難する者もあったと伝えられている。このような儒教規範が国の根幹として揺るぎない社会にありながら、論介がすでに17世紀にはその「忠節」を称えられているのは、論介が妓生、すなわち一人の夫にではなく複数の男性に仕え、国家に奉仕する官婢として見なされてきたこと、併せて壬辰倭乱やモンゴルの侵略など16世紀末以来朝鮮が外敵の侵略を経験したことを経て、論介の殉国を契機にそれまでは男性の徳であった主君や国家への「忠節」を17世紀以降には

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

女性や下位の身分の者にも要求するようになったと考察されている⁸⁾。

特に論介が妓生として最期を遂げた晋州は、朝鮮時代以来妓生を養成する「教房^{キョパン}」という機関（植民地時代以降は「見番」）を配してきた。そのような背景からも晋州では当初から論介を妓生として位置付けてその「忠節」を祀る傾向にあり、その潮流は現代にも続いているのが見受けられる。例えば1970年代には、晋州の見番出身の妓生であり舞踊家の金壽岳（キム・スアク）氏が論介の精神を尊んで伝統舞踊「論介サルプリ」を創作しており、同作品は「晋州論介祭」で奉納されている。また「晋州論介祭」の行事の主体となってきた団体の一つは舞踊団体であり、教房文化の再興・保存を祭りの目的として、「剣舞」など古くから妓生たちによって踊られてきた伝統舞踊作品を披露し、祭のメインイベントとしている。

これに対して、論介が生まれ育った長水では論介を妓生としてではなく、崔慶会の妻として位置付け、その忠節の精神を称えてきた。長水は山間の農村で朝鮮時代には政変に敗れた中央官僚たちが配置されたいわゆる「左遷の地」であったと伝えられている。また今日に至るまで全羅道出身の大統領は金大中（キム・デジュン）氏のみであり、長い間全羅道および長水は韓国全体に占める政治権力の脆弱な地域であったことが伺える。このように古くから朝鮮半島の「辺境」として位置づけられてきた中で、長水は朱論介、墮涙碑の白（ペク）氏、そして丁敬孫（チョン・ギョンソン）を輩出した「三節の郷」と呼ばれ、長水住民は三人がそれぞれ夫、主君、そして国に我が身を投げ出したことを誇りとし、その揺るぎない忠節の精神を住民の護るべき精神としてきた⁹⁾。すなわちそれは、たとえ地政学上韓国の「辺境」と位置付けられようとも長水こそが韓国の伝統的な儒教精神を韓国のどこよりも守り抜いてきたという長水郡民の自負を意味する。よって、今日住民による論介を祀る行為においても、論介が妻であった事実が一貫して提示され、論介の夫への「烈」の徳を前提にその国家への「忠」の徳が称え続けられている。

2. 長水郡朱論介祭り

今日の長水における「朱論介祭り」は、論介精神宣揚会の主催によって執り行われている。論介精神宣揚会は、2000年に長水郡民の声によって、「義巖朱論介の忠節の精神を宣揚し継承発展させ、国民精神涵養に寄与」することを目的に長水郡の行政、文化、教育、青年育成を含む各界で指導的な立場にある人々のリーダーシップにより設立された。論介精神宣揚会の活動内容として、毎年論介の誕生日前後に行う「朱論介祭」の他、論介の生涯や精神、壬辰倭乱をテーマとする学術交流会の開催や論介の伝記、観光用パンフレットなど著作物の出版事業が挙げられる。その中で宣揚会がその目的を実現するための主要な取り組みとして重きを置いているのは、やはり「朱論介祭」である。

これまで「朱論介祭」では、パンソリ、詩の朗読、舞踊、ミュージカル、オペラなど様々

なジャンルの芸能活動が催され、それらのパフォーマンスを通して論介の生涯と精神が表現されてきた。論介精神宣揚会は、「ソリ」（音、音楽の意味）というものが古くから韓国の人々の生活において重要であることから、祝祭を高めるためのツールとしてこれら音や音楽に関連した芸能活動を行事に取り入れ、韓国全国から参加者を募り競演を行ってきた¹⁰⁾。特にパンソリは、古くから農村においても親しまれてきた韓国の伝統芸能であり、論介精神宣揚会はこれを論介の生き方や精神を効果的に表現するものと考えた。そこで同会は、2007年から2008年にかけて論介の生涯を謡った創作パンソリ『論介』を製作し、人間文化財の安淑善（アン・スクソン）氏が謡ったものを収録したCDを2,000部発行した。続けて2010年より、同作品の「論介パンソリ全国競演大会」を祝祭で開催し、厳選な審査のもと選出された優秀者には賞金を授与している¹¹⁾。

詩の朗読会も「ソリ」の芸能として祝祭における人気の行事である。こちらも競演の形式をとり、参加者は論介に関する内容の自由詩を暗唱（韓国語で「朗謡」と表現）し、詩の内容、構成、リズム、朗謡の態度を競う。会の審査員を務められ、論介の研究者として多くの詩を著した先述の詩人・高斗永氏によると、朗謡はそれによって詩に音、あるいは音楽的な要素が入り、聴衆を感動させる効果があるため重要である¹²⁾。

論介の生涯や精神を踊りで表現した舞踊大会もまた常に祭の主要な行事として、パンソリ大会や詩の朗読会同様に全国から募った参加者による舞踊競演大会が1999年以来開催されてきた。その中で、それら競演大会と並んで2000年から2010年まで、「朱論介忠節舞」という舞踊劇が未来農村長水郡女性会（これ以降、長水郡女性会と表記）の主管により公演された。

長水郡女性会は論介の純潔な精神を広め、美しく澄んだ自然のある長水を護りたいという動機から後に長水郡議会議員になった劉錦善（ユ・ Gumソン）氏が中心となって発足した会である。劉錦善氏自身、幼い頃に母親の歌う論介の唄に、国への忠誠と父母への孝行を祈禱のように聞きながら育つ中で純粋で清らかな論介と長水は劉錦善氏の誇りとなった。同会は自然保護のためのゴミ拾いや老人介護施設を訪問して介護するなど様々な奉仕活動を行ってきたが、特に論介の精神を護る活動として舞踊団が結成され、詩人・高斗永氏による論介の生涯を著した著作を下敷に「忠節舞」が創作された。当時の長水郡教育長で伝統舞踊に通じていた趙今淑（チョ・ Gumスク）氏が総監督を務め、舞踊専攻の大学院生が創作に加わった。会員たちは3月から10月までの8か月間、週二回全州から全羅北道立国楽院教授・林明玉（イム・ミョノク）氏を招いて指導をもらい、1998年10月に初めての論介忠節舞創作発表会を披露した¹³⁾。

「忠節舞」の活動は、年々大きく発達していった。先述の通り、2000年の三回目の発表会からは「朱論介祭」の場で公演されるようになった。この時には嶺南大学教授・郭泰天（クァク・テチョン）氏によって「忠節舞」に音楽が付けられ、その旋律に合わせて総監督の趙

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

今淑氏が舞踊劇の内容と振付を全般にわたり改訂した。すなわち、それまでの論介の生涯を描く構成——論介の幼少時代、「三節の郷」として論介の育った村の様子、論介と崔慶會との出会い、論介と崔氏の幸せだった時代、壬辰倭乱の勃発、晋州城の戦、崔氏の自刃と論介の悲しみ、論介の殉死——に新たに「護国の女神」として論介が蘇る場面が加わった。そのことによって、論介の精神を「私たちの心の中に永遠に息づかせんとする一大叙事詩を舞で表現」したと初代会長の劉錦善氏は語っている¹⁴。改訂された長水郡女性会の「忠節舞」は同年6月中旬に開催された全国の舞踊競演大会（正式名称や主催者など詳細は不明）に出場し、特賞を受賞した。また、その頃には長水郡の農協が練習場所を提供してくれた。活動資金についても当初は会員たちの寄付によって賄われていたものが、長水郡主や長水文化院長など長水郡行政関係者が会員たちの熱心な活動の様子を見て感動し予算をつけるようになり、2002年からは年間2千万ウォンの支援を得るようになった。

舞踊団に参加した会員たちは、長水郡在住の農家の中年層の主婦たちで、家事労働をこなす傍ら農作業や牛乳配達をする人や食堂で働く人など様々であった。女性たちは一様に舞踊に関しては素人であったが舞踊に魅力を感じ、ひとつやってみようという意気込みで「忠節舞」を始め、家事や労働で忙しい中、ゆでたトウモロコシやジャガイモなどを持ち寄りながら練習に打ち込み、発表会や祝祭の舞台で活躍した。公演を観る人たちは、出演者たちの素人臭くあか抜けないが一所懸命に踊る様子に称賛を送った¹⁵。

2000年の第三回目の発表会パンフレットの中で「企画・総監督の弁」として総監督の趙今淑氏は、自分たちは舞踊の専門家ではないが「三節の情緒が込められた長水という特別な地域社会で、論介の忠節の精神を受け継ぎ、女性の人生を向上させるのに一歩、歩を進めることができた」と記している¹⁶。また初代会長の劉錦善氏は2015年に当時を振り返り、農村の女性たちが「野良仕事をし、食堂で働いた《荒れた》手で踊り、舞う、ということにも意味がある」とし、自分たちは「自尊心を持ってやってきた」と語っている。そして、「忠節舞」は、企画者、振付師、舞踊指導者、参加者、支援者を含め活動に関わった全ての人々の強い奉仕精神によって成り立っていたと回顧している¹⁷。

3. セウォル号追悼集会における論介サルプリ

論介と論介の精神はまたもう一つの市民社会において、不幸な出来事に遭った人々の傷ついた心を癒す存在として登場している。2014年4月16日、仁川港から済州島へ向っていた大型客船セウォル号が^{チヨンラナムドチンドグン}全羅南道珍島郡の海上で転覆・沈没し、乗船していた修学旅行中の安山市高校生325名と引率教員14名、その他の一般乗客108名、乗務員29名の計476名のうち死者295人、行方不明者9人、捜査作業員の死者8人の犠牲者を出す大惨事となった。事故当時、船長はじめ乗務員は乗客の救助を怠ったとして刑事責任を問われ、続いて船舶会社

の経営や労使管理体制の杜撰さや中央政府の事故への対応が遅れたことへの非難が国内で高まった。また平行して、事故への反響として市民レベルでは様々な追悼集会が開かれた。その一つで、事故から一年後の2015年4月にソウル市庁舎前広場の特設舞台で開催された集会において、朱論介をテーマとする韓国伝統舞踊「論介サルプリ」が舞われている。

1980年代後半から1990年代にかけての民主化運動の時代において、労働者、学生、一般市民による様々な組織や団体が結成され、民主化運動を牽引してきた。ソ連邦の解体などの影響により、今日の組織は全般として反体制的ないしは社会主義的なアプローチによる活動を行うことが難しくなるとされているが、一旦権力機構による不正や体質の腐敗が明るみになった時や社会的な有事において既存・新規を含めた多くの団体組織が社会運動を展開する。そのような市民運動の伝統と潮流の中で、同追悼集会は現存する特定の団体や組織によって主宰されたものではなく、その時に集会を執り行うために有志が集まって結成された俗称「セウォル号対策委員会」によるものであった。「論介サルプリ」を舞った舞踊家・金美善（キム・ミソン）氏も大学在学中に様々なジャンルの芸術家が集う民衆運動組織に所属し、パフォーマンスなどの芸術・文化活動を通して社会運動に参加していた経歴を持つ¹⁸⁾。金美善氏は、かつて同じ運動組織で共に活動していた大学の先輩から企画する追悼集会への出演を依頼された。

追悼集会で踊られた「論介サルプリ」は、晋州出身の妓生で舞踊家の金壽岳氏が、論介が南江に面した義巖岩の上で舞ったという言い伝えに立脚し、幼い頃に学んだ嶺南地方（晋州を含む慶尚道地方を指す歴史的名称）のサルプリ舞を元に創作した舞とされている。「サルプリ」とは、邪気や厄などを祓うという意味の民俗用語で、特に全羅道地方に由来する巫女の厄払いの儀礼で独特のリズムに合わせて踊る舞を指す。20世紀に入り、多くの舞踊家により「サルプリ」のリズムに舞が付けられ、「サルプリ舞」は今日、韓国伝統舞踊の代表的なジャンルの一つとなった。一般に「サルプリ舞」は、舞い手や観る人の内面に働き掛けて心に積もった情や念を解きほぐす意味があるが、その対象は不特定であり、「論介サルプリ」のように特定の人物をテーマに創られた舞踊作品はめずらしい。金壽岳氏は論介の忠節と勇氣に深い敬愛の思いを抱き、その魂を癒すために同作品を創作したとされる。

金壽岳氏は解放前から論介追悼碑建立のための募金公演を開くなど、論介を称え、祈念するための多くの活動を行ってきた。いわば、金壽岳氏自身、市民社会における運動家としての側面を持っていたと言えよう。金壽岳氏が厳密にいつ「論介サルプリ」を創り上げたかは不明であるが、すでに1940年代には晋州で論介の祭祀が行われる際に同作品を舞っていたことが伝えられている。さらに1970年代からは、金壽岳氏は門下生たちに「論介サルプリ」を伝授し、様々な舞踊競演大会で受賞している。今日、「論介サルプリ」は金壽岳氏の代表作品の一つとして知られている。

2015年の追悼集会には、二つの目的が定められていた。一つは無念にも亡くなってしま

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

った犠牲者への鎮魂と肉親や親しい人との突然の別離に悲痛と混乱を抱えて苦しむ遺族たちへの癒しであり、もう一つは中央政府に対する事故の真相解明と遺族への対応改善の要求である。金美善氏は、そのような癒しと抗議の場において踊るサルプリとして「論介サルプリ」以上のものはないと考えた。それはすなわち「論介サルプリ」には劇的なドラマがあり、観る人はそこに個々の人生や経験、状況、感情を重ね合わせることができるからである。

そしてこの論介のドラマとは決して一様な紋切り型の物語ではなく、例えば、蛇のように敵の武将に目を付ける論介、生きようか死のうかと悩み葛藤する論介、死の淵に飛び込む決意をする論介など、観る人によって論介の姿は幾通りもあり、多様な解釈が可能である。金美善氏の踊る論介は、芸妓や人妻、ないしは愛国者である以前に自分の身近で傷ついている誰かのために命を捧げ、癒すために生きた女性であり、怒り、悲痛、葛藤、恐れ、愛、決心など複雑な感情の振幅を抱えた一人の人間であった。同様に遺族たちもまた踊りを観ながらセウォル号事故を含め人生の連続性の中で経験してきた悲しみや苦悩の記憶と最後まで向き合うことで癒しが得られる。

同時に論介の姿は、甚大な被害を受けたまま放置されているという人権侵害に対して抗議の声をあげるための、能動的なエネルギーを遺族たちや参加者の内面に起こすことに繋がる。妓生であったにも関わらず、敵将とともに河に身を投げた論介の勇敢さと決意を舞に表現することで、今後も継続して共に政府と闘っていくことを遺族たちに鼓舞する意味があったと金美善氏は語る。このような実践には1960年代から90年代にかけての社会運動とそこに命を賭してきた人々の姿が重なる。金美善氏自身「論介サルプリ」を踊りながら、運動に身を投じていた当時のことや同志たちのこと、幾多の苦しみや悲しみを乗り越えてきたこれまでの人生が脳裏に浮かんでいた。同様に遺族たちもまた苦しみや悲しみを背負っているのは自分だけではないことに気づき、同時にその場に集う参加者との間に公共善に向かって共闘していくという連帯感が築かれるのである¹⁹⁾。

むすびにかえて

本稿では、崔章集氏による現代韓国の市民社会のテーゼの事例として非政府組織による朱論介を祀る二つの活動を提示してきた。そのうちの長水郡における論介精神宣揚会が主催する「朱論介祭」は、朱論介が崔慶会の妻であった事実を提示しながら、論介の夫と国への忠節を称え、祈念するものであった。朝鮮王朝時代から植民地時代、解放期から朝鮮戦争期、そして現代への時代の流れと韓国社会の変容の中にあって、長水郡民は「三節の郷」として韓国の伝統的な儒教的道徳観を一貫して護り続けてきた。そのことがいわば長水郡民のアイデンティティであり、そのことこそが郡民の国への忠節の表明に他ならない。論介を祀る祭祀や祝祭行事において主催団体と参加者の間で共有される公的精神、あるいは公共善は極め

て明確・明快であり、団体は活動を行うことについて中央・地方政府や公的機関から財政的・物理的支援を得るなど奨励を受けるまでになった。

もう一つのソウル市庁舎前で開催された2015年セウォル号沈没事故追悼集会は、特に80年代の民主化・社会運動期に組織を結成し、活動に参加していた人々が主宰したものであった。乗組員や船舶会社の無責任さや中央政府の事故対応の不味さが取り沙汰される一方で、遺族たちは悲痛と孤独感の中に取り残されていた。事故以来開催されてきたその他多くの集会同様、追悼集会は中央政府や公的機関とは独立したものとして、犠牲者を弔い遺族たちを癒すために開かれた。このとき舞われた「論介サルプリ」は、論介を悲痛に苦しむ人々を癒すために我が身を捧げた一人の女性として表現し、参加者が個々に論介の物語を自分の人生と重ねるように追体験することで癒しを促すものであった。このように追悼集会在目指す公的精神としての鎮魂、あるいは精神の悲痛からの解放は、参加者それぞれに個人的で多様であった。しかし同時にあらゆる人間に共通する経験として悲痛や悲しみを受容し、さらに人権侵害に対して権力機構に抗議する意志を奮起させることで、集まった参加者の間に共感と連帯の意識が芽生えた。

両者を崔章集氏のテーゼに則してまとめるならば、前者は韓国の中核的な構造に統合された市民社会の再生の事例であり、後者は民主化運動を基盤とする非中核的な市民社会の創造の事例であると言えよう。しかし二つの市民社会を主導する運動組織、あるいは個人の活動の根幹に共通しているものは朱論介の存在であり、その精神である。換言すれば、今日の論介祭祀も「論介サルプリ」も、活動の出発点にあるのは植民地期韓国における日帝への抵抗であり、そのことを通して再構築される韓国人という自我ないしは共同体の意識であった。朱論介の存在そのものが侵略者に抵抗する韓国人の象徴であり、その精神こそが彼らの掲げる公的精神であることには、いずれの市民社会において活動する人々にも疑いの余地はない。しかしそれは決してモノリシックな伝統ではなく、解放、分断、民主化、自由主義経済、グローバリゼーションと刻々と移り行く韓国の歴史的な文脈において、そして抗議と抵抗の対象である権力機構が何であるかによって変容し、いわば主流派と革新派の異なる市民社会へと発達していったと考察されるのである。

*本研究は、東京経済大学個人研究助成費により可能となりました。また、韓知希（ハン・チフィ）さん、高年世（コ・ヨンセ）さん、金香清（キム・ヒャンジョン）さんには、関係者へのインタビューの通訳および収集した資料の翻訳で大変お世話になりました。この場を借りて御礼を申し上げます。

注 _____

1) 崔章集（磯崎典世，出水薫，金洪楹，浅羽祐樹，文京洙訳）『民主化以降の韓国民主主義 危

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

機と起源』, 岩波書店, 2012年。戦後の韓国政治と市民社会については, 文京洙『韓国現代史』, 岩波書店, 2005年; 清水敏行, 魚住弘久編『韓国政治の同時代的分析』, 北大印刷, 2007年; 申龍徹「市民活動の法制度と支援に関する日韓比較」, 『自治総研通』巻342, 2007年4月号を参照。

- 2) 韓国における祭りについての従来の研究は地方経済の活性化や祭りの商業化の側面を論じるものが多く, 例えば, Won Gyu Ko, Sang Hoon Lee, “A Study on Tourism Commodification of Traditional Art: Anthropological Approach on Nongae Festival,” 国際観光学術大会, 2004年; 神谷智昭「観光資源としての海神祭—韓国の一地方漁村における観光開発の試みを中心に—」, 『史境』50, 2005年3月; 糸山健介「あのマチこのムラ・地域おこし活躍中 No.50 韓国太白市の事例—農村観光で地域振興—」, 『地域と農業』67, 2007年10月; 李良姫「祭りの創出・観光資源化の成功要因と課題—韓国咸平郡「蝶々祭り」を中心に—」, 『日本地域政策研究』, 第12号, 2014年3月などが挙げられる。これに対し本稿は, 祭りを市民社会活動の事例として位置付け, その特徴について考察するものである。
- 3) 「誕辰 426周年 義巖朱論介大祝祭」, 2-3頁。
- 4) 韓珪夏（ハン・キュウハ）氏へのインタビューより。
- 5) 高斗永氏へのインタビューより。
- 6) 韓珪夏氏へのインタビューより。
- 7) 義巖朱論介精神宣揚會『道を巡って探す義巖朱論介の足跡』; キム・イングァン, チョン・スヒャン「論介サルプリと金壽岳流サルプリ」, 『論介サルプリ』, 如山書藝, 2015年。
- 8) Jung Ji Young, “War and the Death of a Kisaeng: The Construction of the Collective Memory of the ‘Righteous Kisaeng Non’gae’ in Late Choson,” *Seoul Journal of Korean Studies*, 22, no.2 (December 2009).
- 9) 『韓国現代史』参照, および陳玉燮氏（チン・オクソプ）, 梁海道氏, 金サンジュン氏へのインタビューより。特に陳氏は, 近年の韓国各地における祭り創設の流行に触れ, これに付随して地域に伝わる伝承がオーセンティックな「歴史」ないしは「物語」として創られている現象を指摘している。
- 10) 梁海道氏, 金サンジュン氏へのインタビューより。
- 11) 例えば, 「2012年 義巖朱論介誕辰438周年 記念」を参照。
- 12) 高斗永氏へのインタビューより。
- 13) 劉錦善氏へのインタビューより。
- 14) 「誕辰 426周年 義巖朱論介大祝祭」, 10頁。
- 15) 劉錦善氏へのインタビューより。
- 16) 「誕辰 426周年 義巖朱論介大祝祭」, 10頁。
- 17) 劉錦善氏へのインタビューより。
- 18) 民衆運動における伝統芸能の実践については, 徐京植「誇り高き田舎者——シン・ギョンホ（申貞浩）」, 『越境画廊 私挑戦美術巡礼』, 論創社, 2015年を参照。
- 19) 「論介サルプリと金壽岳流サルプリ」参照, および金美善氏へのインタビューより。

参考文献・資料

一次資料

I. インタビュー

1. 義巖朱論介宣揚會會長 梁海道氏 (2015年8月24日, 全羅北道長水郡朱論介祠堂にて実施)
2. 義巖朱論介宣揚會前事務局長 金サンジュン氏 (2015年8月24日, 全羅北道長水郡朱論介祠堂管理事務所にて実施)
3. 義巖朱論介宣揚會理事・詩人 高斗永氏 (2015年8月26日, 全羅北道長水郡朱論介祠堂管理事務所にて実施)
4. 未来農村女性研究会前会長 劉錦善氏 (2015年8月26日, 全羅北道長水郡朱論介祠堂管理事務所にて実施)
5. 長水郡前職員・書芸家 韓珪夏氏 (2015年8月27日, 全羅北道長水郡朱論介祠堂管理事務所にて実施)
6. KOUS 芸術舞台監督・韓国伝統芸能史家 陳玉燮氏 (2015年8月28日, KOUS内陳玉燮監督オフィスにて実施)
7. 舞踊家 金美善氏 (2015年8月31日, ソウル市内喫茶店にて実施)

II. 朱論介祭りパンフレット

1. 「義巖朱論介大祝祭」(誕辰426-440周年)
2. 「2012年 義巖朱論介 誕辰438周年 記念 朱論介パンソリ大会」

二次資料

1. 李良姫「祭りの創出・観光資源化の成功要因と課題—韓国威平郡「蝶々祭り」を中心に—」, 『日本地域政策研究』, 第12号, 2014年3月。
2. 糸山健介「あのマチこのムラ・地域おこし活躍中 No. 50 韓国太白市の事例—農村観光で地域振興—」, 『地域と農業』67, 2007年10月。
3. 義巖朱論介精神宣揚會編 (韓知希訳) 『道を巡って探す義巖朱論介の足跡』。
4. 神谷智昭「観光資源としての海神祭—韓国の一地方漁村における観光開発の試みを中心に—」, 『史境』50, 2005年3月。
5. キム・イングァン, チョン・スヒャン「論介サルプリと金壽岳流サルプリ」, 『論介サルプリ』, 如山書藝, 2015年。
6. Won Gyu Ko, Sang Hoon Lee, “A Study on Tourism Commodification of Traditional Art: Anthropological Approach on Nongae Festival,” 國際觀光學術大會, 2004年。
7. 清水敏行, 魚住弘久編『韓国政治の同時代的分析』, 北大印刷, 2007年。
8. 申龍徹「市民活動の法制度と支援に関する日韓比較」, 『自治総研通』巻342, 2007年4月号。
9. 徐京植『越境画廊 私の朝鮮美術巡礼』, 論創社, 2015年。
10. 崔章集 (磯崎典世, 出水薫, 金洪楹, 浅羽祐樹, 文京洙訳) 『民主化以降の韓国民民主義 危機と起源』, 岩波書店, 2012年。
11. 文京洙『韓国現代史』, 岩波書店, 2005年。
12. Jung Ji Young, “War and the Death of a Kisaeng: The Construction of the Collective Memo-

朱論介（チュ・ノンゲ）を祀ること

ry of the 'Righteous Kisaeng Non'gae' in Late Choson, *Seoul Journal of Korean Studies*, 22,
no. 2 (December 2009).